

---

# リリカルなのは～落ちこぼれと言われた英雄～

笑い顔の猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのは〜落ちこぼれと言われた英雄〜

### 【Nコード】

N5214V

### 【作者名】

笑い顔の猫

### 【あらすじ】

初級魔法しか使えないがために、『落ちこぼれ』と言われた主人公「ゼオニス・ウォルエル」であったが、多くの困難に立ち向かい、多くの人を救ってきた彼は『英雄』と呼ばれるほどの功績を残した彼であったが、とある破壊された残骸の処分を行おうとした時、原因不明のエネルギー上昇が・・・  
急ぎ転移を行おうとしたが失敗してしまい、  
ついた先が何とリリカルなのはの世界だった!?

この先主人公ゼオニスに何が待ち受けているのか！？

笑い猫「なんかやってしまった感がありますが後悔はしていない！

」

キリッ！

注：作者は素人ですので平にご容赦を・・・m)。|)。;( ) m  
ペコペコ...

## 第一話 始まりは突然訪れる（前書き）

笑い猫「第二作目！いちおうできたにゃ！！」

刹那「ねえ俺は！？」『恋姫』の分はどうなった！？」

笑い猫「そっちはまだ考えてるところがたくさんあるから・・・  
ごめん今は無理（キラッ）」

刹那「お前なああああああ！！！」

笑い猫「まあまあ 落ち着きなつて、そのうち書くかじえい」  
さて、せつちーのことはおいといて、  
第2作品目、どうぞ！！」

## 第一話 始まりは突然訪れる

そこはただ広い森の中・・・

ズドオオオオオオン！！！！

そこには、顔は中性的で、白く長い髪を縛り、瞳は茶色、腰に二丁の銃を備え、接近戦用と思わせる黒い服装を着こなした男が一人、

その男の名前は「ゼオニス・ウォルエル」・・・

男とはまったく逆で、茶色で長い髪を靡かせ、瞳は白く、白いワンピースを着こなしていて、

両腕には鳥のようなタトゥーを入れた、

『アドモス』と呼ばれる契約精霊の女の子一人、その女の子の名前は「レイン」・・・

そして、全身を硬い緑の鱗を纏い、危険ランク度Aに認定されている、

『トライラントドラゴン』と呼ばれる全長30mはあろうか、巨大なドラゴンがその場に存在していた・・・

現在の状況を一言で表そうとするのなら・・・そう・・・

「いやああああああああああああああああああ！！！！！！」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

逃走中である。

「なにっ！？今日は疫日なの！？  
なんでこんなの所にトライラントドラゴンがおるんじゃあああああ  
！！！！！！」

「何をいまさら・・・いつものことじゃないですか。」

「否定できない事実がとてつもなく悲しいぞおい！！」

ああ認めてやるさっ！初級魔法しか使えなかったり、誘拐されたり、  
落とし穴やトラップで死にかけたり、

魔力暴走したり、果てには魔王？を倒しに行ったり・・・

「運が悪いのなんて昔っからじゃああああ！！（泣）」

「サラッ、と言いましたが運がただ悪いのじゃなく、  
壊滅的に運が悪いだけじゃないですか。」

「あれえ！？声に出てたのか！？てか壊滅的に、って・・・俺に救いは！？」

「そんなもの・・・あれの中にあるんじゃないですか？」

指の指したもののそれは・・・

「ん？トライラントドラゴンを指して、って俺にあれに食われろと  
！？」

「らくになんなよ、旦那」

「ぶちのめそうかコラア！？！？ってかお前ほんとに俺のアドモス  
かよ！？

一応曲がりなりにも主は俺だよ！？」

「主？なにそれ？おいしいの？」

ガシッ   つかむ音

ポイツ  
投げる音

「投げないでよおおおおお!!!」

「なんだ？食われてなかったのか、ツチ！」

「あからさまな舌打ちされた!？」

「まあ、気にしないでもう一度いつてk」「ごめんなさい、もう言いません、

「ご主人様バンザーイ!!」  
「つつたく!!」

追われている最中だというのに何とも気の抜けた会話が成り立っているのだが、

「あ、マスター……そろそろ森を抜けますよ……準備をどうぞ」

急に声のトーンが下がった・・・まるで誰かと人格が変わるように、一瞬で目つきが変化すると同時に男は腰にある銃で森の抜けた先に引き金を引く！

ドガガガガガガガッッッ！！！！



撃ちだされた銃弾により、

森を出た先は砂煙で視界がゼロの状態になってしまう……

「ギヤオオオオオオオオオオオオツツツ!?!?!」

いきなり前が見えなくなったことでトライラントドラゴンに驚きのあまり、

砂煙の中動きを止めてしまふ……  
だがその行動は間違いであった……

「・・・戦場や戦いの場で足を止めるということはどういうことを招くかわかるか？」

声が響くと同時に突風が吹く．．．そのおかげで砂煙がはれるとそこには、

「そんなの決まっていますよ・・・」

答えは「次の日の朝日が拝めなくなる」

ただそれだけです」

大きな円を描くように、クルクル回りつつ、トライラントドラゴンの首に巻きつくように、



ゼオニスとレインは契約を執行・・・

レインに淡い光が灯し、ゼオニスの体には稲光が走り、  
ゆっくりと二丁の銃を構えた……

「『確認終了』これで終いだ・ ・ ・

ツインホーン ライトニング  
『双角なる雷』 カチツ

スウウンツツ・・ツカ!!!!

**ズガア  
アアアアアアアアアア  
ンツツツツ！！！！！！**

引き金は引かれ、その一撃は轟音とともに放たれた。

二丁の銃より放たれた攻撃は視界を覆うほどの攻撃であり、それを食らったトライラントドラゴンは首から上がなくなり、体は音を立てて崩れた・・・

「ジ・エンド……ってか？」

「お見事、さすがだね・・・これだけのことができてなんで二つ名が落ちこぼれた英雄」なんだろうね・・・」

「ん？仕方ないんじゃない？初級魔法しか使えないのは本当だし？  
てかお前だって『欠陥精霊』って呼ばれてんじゃないか」

「それはほかの奴らじゃ魔力がへなちよこすぎるのが原因だ、私にや落ち度はないね」

「はあく・・・とりあえず調査を続けるぞ・・・」

「がんば」

「てめえも手伝えよ!?!」

こんな森に調査をしに来ているのは、1年前に俺が破壊した『ヴァルサス』

と呼ばれていたものの残骸があると噂があり、  
その処分に来ていた。

なぜ残骸を処分しているかと言うと、ヴァルサスの残骸はいわばエネルギーの塊、  
だが、同時に悪質な物質も混ざっているため、爆発する恐れもあり、  
さらにそれを使って悪質な物を新たに生み出そうとする組織もいた  
ためである。

爆発や悪用を防ぐため、多くの残骸が国の手によって処分されてきたが、

森の奥や山の奥まで飛ばされてきたものは国からの手が届かず、放置されてきた。

その放置されてきたものはこの1年をかけて発見、処分を行ってきたためやっと、

残骸があると噂されているのはこの森だけとなっていた。

「うんやっぱりこの近くに「それにしてもゼオ」ってなんだ？」

「最後の残骸、破壊した後どうすんの？またギルドで名を馳せる？それともどっかの国でも仕えてみるの？」

「あゝ・・・1年間も残骸の処分を続けてきたからそればかりだったもんなゝ・・・」

はつきり何も思い浮かばねえや」

「確かにねゝ・・・やることが急になくなっちゃうとなゝ・・・旅って言うならほとんどの大陸わたっちゃたしゝ」

事実、2人が旅に出たのは四年前のゼオニスが15歳頃、なし崩しのヴァルサスを破壊することになったり、誘拐から人助け、はたまた国の反乱まであったほどだ。

それだけの経験を体験するのに伴い、さまざまな国に回り、自分たちが知りうる大陸を制覇してしまっていた・・・

「まあ何をしようか考えるのも後だ後、俺らにはまだまだ時間があることだし、ゆっくり考えていったらいいだろ？」

「まあ俺もそうだねゝ、って・・・ゼオツ！あれっ！！」

「ん？おお、あったな・・・ってでかつ！？」

見つかった残骸は身の丈の6〜7倍あるかと言つほどの大きさであり、黒くてまるで刃でも思わせるような残骸であつた。

「はあ……よくこんな大きなものが残つてたね」

「……」

「ん？どうしたの？」

「マクマーレ王国の連中、絶対調査の手抜きしてやがつたな……今だけの質量がもし爆発するようなことがあつたら森が消えてなくなるぞ」

「ん？仕方ないんじゃない？それはゼオにだってわかつてるはずじゃない？」

「しかし、いくら独裁国家を転覆させたからってなあ」

「でも元に戻す方法なんて時間もかかるわお金もかかるわのオンパレードでしょ？」

「昔っから変わらないじゃない、『壊すのは簡単、でも直すのは難しい』ってね」

「はあ……しゃーねーか、とりあえず処分するぞ」

そう言つてレインとともにゼオニスはエネルギーの割合を調べるた

め残骸に触れたその時、

スウウウウウウンッッ！！！！

「「！？」」

いきなりヴァルサスの残骸は震え始めた

「な、エネルギー率が上昇してる！？ゼオツ！！」

「何が起こつてんだ！？いつたいてうして・・・つく  
『アドモス、契約執行、転送、<sup>リンク</sup>繋がれ』」

ゼオニスは焦りながらも来た道の30km離れた森の入り口へ転移しようとするが、

どンドン残骸の震えは大きくなっていく・・・

「『契約受諾、転送先、確認、<sup>ロード</sup>道筋、<sup>イレギュラー</sup>不安定、強制、<sup>セッ</sup>確定』」

そのおかげで転移に影響が出てしまい、空間をつなぐ道筋が歪んでしまい、

不安定になったが、いつ爆発するかも分からない残骸の近くにいるとさらに危険なため、

強制的につなぐ・・・

「（間に合うかどうかは五分五分・・・間に合ってくれ！！）  
『確認完了、<sup>ジャンプ</sup>転移・・・<sup>スタート</sup>開始』

フオブオオオオンッ！！

その時大きな光がほとばしり、空を高く高く、天を裂くほどの光が昇っておった・・・

その光は徐々に収まると、二人と残骸があつた場所には何も残ってはいなかった・・・



## キャラ紹介

『落ちこぼれた英雄』

ゼオニス・ウォルエル

性別 男 年齢 19歳

身長 175cm

魔力量 計測不能

戦闘スタイル『詠唱呪文』『ガンスタイル』『ブレイドアタッカー』  
3つのスタイルを使い分けるオールラウンダー

魔法を使った詠唱呪文が使用できるが、  
体質上の関係で初級魔法しか使用することができない。

所持している二丁の銃は特別製であり、剣としても使え、名前は『  
ダブル  
D・ジャガー』

性格は物事を深くは考えない大雑把性格だが、先のことはちゃんと  
考えることができ、

嘘や隠し事を見抜くことができる

良くも悪くも自分の想いにまっすぐであり、かなりのお人よし  
容姿はかなりの美系であるが本人は気づいていない

(過去ファンクラブもいたみたいだがその存在すら本人は知らない)

契約精霊『アドモス』      『欠陥精霊』

名前『レイン』

性別 女    年齢 不明

身長 17 ～ 18 c m

『アドモス』・・・主人公の世界である契約精霊の別名  
契約者の覚悟を受け入れ、思いをに答えることで契約精霊はそれを糧に生きることができる

『欠陥精霊』・・・レインの場合特殊であり、契約者の魔力をとるに必要とするため  
波の魔法使いではなくに魔力はなくなってしまう  
契約者から欠陥精霊扱いをされてしまう・・・

性格はいつも天真爛漫、からかうことが大好きで調子に乗りすぎる  
ことがしばしば・・・  
だが決め手となる所は恐いくらい冷静になる

## 第二話　ここどこだ？ってちっちゃくなっちゃった！？（前書き）

ゼオ「おいっ！投稿がかなり遅いがどうなっている！？」

笑い猫「ああ・・・実はね？パソコン壊れちゃって（テヘツ）」

ゼオ「テヘツ、じゃねえよ！？どうしたら壊れんだよ！？」

笑い猫「親父にクラツシュされたんだよ！！仕方ねえだろ！？これだってパソコン借りてやっとこ投稿で来たんだよ！？」

ゼオ「おいおい・・・」

笑い猫「と、言う訳でパソコンは修理中ですたい・・・更新スピード、更にダウン（・・・）ショボーン皆さん、すまなんだ・・・」

ゼオ「・・・ドンマイ」

第二話 「どこどこだ？ってちっちゃくなっちゃった！？」

転移の後・・・

「・・・う・・・？」

目が覚めると森の中だった・・・どうやら爆発から逃れられたようだ・・・

とりあえず転移自体は成功したみたいだな・・・でも・・・

「・・・ここどこだ？（ムクリ）森は森でも違う森っぽいし・・・？あれ？レイン？レイン？どこ行っただ？」

体を起こし、見回すとレインの姿が見えなかった、まさかあいつだけ失敗したとか？

そんなことを思っていると、

「ぶぎゅ～～～～～～～～～～・・・」

「？なんだ、今の変な声？どこから聞こえて来んだ？」

「ぶぎゅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

「・・・？尻の下？」

恐る恐る尻の下を見てみると・・・

「ぶぎゅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」 お尻で乗られているレイン

「・・・」 お尻で乗ってる俺

結論・・・！！

「見なかったことにしよう・・・」

「サッサと退けやああああああああッッッ！……！！」

・・・ちょっと待ってね

「おぉおぉおぉおぉ」 「ぶぎゅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

「たくっ！」

いてえ・・・魔力を込めたこぶしで何発も殴りやがって・・・

「サッサと退かないあんたが悪い、それにしてもゼオ、あんたそれどうしたの？」

「？何がだ？」

「・・・気づいてなかったのね、空間魔法から鏡出して見てみなよ」

「？なんだってんだ？」

疑問に思いつつ空間魔法を使って鏡を出してみてみると・・・

・・・(。；)エッ!?

(。／＼)うじうじ(／＼)

「・・・な、なんじゃこりやあああああああああああ  
あっ!?!」

かなりびつくりしたのも無理はない、鏡を見てみると俺は何と・・・

「・・・なんで若返ってんねん・・・」

「さあ？無理やりに転移しようとしたせいじゃない？」

「・・・なんかやけに冷たいな・・・まださっきのこと気にしてんのか？」

「さあ〜どうやるな〜」（にやにや

・・・その笑顔うぜえ・・・

鏡を見てみると、身長120cm前後（5、6歳くらいか？）、髪と瞳は前と同じで顔つきは、  
平凡（かつこいい＆かわいい故ファンクラブがいたほど）なままであった

「この鈍感ニブチンやろう（ボソッ」

「ん？なんか言ったか？」

「いや別に、それよりゼオ、近くに町があるみたいね。  
行っでここがどこだか調べた方がいいよ。」

「そうか？じゃあ早速「ちょっと待ちい」ってなんや？」

「その腰に付けたごつい銃、しまって行き、他の人が見たら絶対怪しいから」

「む、確かにな」

言われてみたら確かにそうだ、子供がこんな銃持ってたらそらなあ・  
・

「それと私も隠れとくよ・・・ここらじゃなんか精霊の気配が全くないのも気になるし」

「そうなのか？だったらここは機械都市『メタルオーシャン』のどつかか？」

機械都市『メタルオーシャン』

科学が爆発的に発展した都市、だが科学ばかりに目を行かせすぎたやり方を尊重しすぎ、

逆に精霊を蔑む考え方が広まってしまったことで精霊がいなくなってしまった、

海の上に来た都市

「うーん・・・違うと思うよ？」

精霊の私にとってはここは暮らしやすいそんな感じがするし、嫌な感じがまったくないし・・・」



「そつか・・・とりあえず行ってみるか」

森から出て、町に入って見てすぐにわかった・・・

ここは、俺達が住んでいた世界と違う場所・・・

異世界だと・・・

街並みや技術では俺達の世界と似た所があるにはあったが、決定的も言える魔法の力が一切なかったからである・・・

元々俺達の世界にも神隠しでいなくなった奴や飛ばされてきた奴もいたくらいだから、  
そう驚きはしなかった・・・

まいったなこりゃ・・・

安全を考えて念話で話すことにしている・・・どこに何が潜んでいるか分からないからだ

・・・

ん？どうしたよレイン？黙りこくっちゃまって？

・・・ゼオ、この街すごいよ・・・霊脈がある・・・しかも妖精<sup>フェアリー</sup>クラス・・・

手を付けられてないみたいだけど・・・

・・・まじ？

霊脈・・・

その土地での位ことであり、精霊が生まれる源のようなものである・

高位の魔術師、魔道師、魔法使いなどはそれを利用して運氣の流れよくしたり、

結界、迎撃用魔法陣の活用から魔法実験などなどに利用することができるものである

妖精<sup>フェアリー</sup>クラスと言うのは霊脈的にはかなり高位的な霊脈であり、町の所にあるというのは珍しい・・・

事故でこっちに来ちゃったけど凄いもの見つけちゃったね

ああ、そうだな・・・誰も手をつけてないようだが、とりあえず今は保留な？

ここでの情報は皆無に近い状況だしな・・・

ええー・・・

我慢しろ、まずは情報とその整理が先決だ、

ここは俺たちと違う世界、

もしかしたら違うルールだって存在してるかもしれない・・・

下手に敵を作るような真似なんてしてたら命がいくつあっても足りねえよ

うっ、確かに

だろ？とりあえずは情報収集するしかねえ、だからおとなしくしてろ

りょうかい

やれやれ・・・いつもこのくらい物分かりが良いのなら苦勞が減るのだが・・・

そしてしばらく街を散策し、公園と呼ばれるところに腰を据えて情報整理を行っていた・・・

わかったことを整理すると、

1、やはりこの世界には魔法を使うという概念がない

2、科学力が発達しているが、俺たちの世界のように爆発的に発達している訳ではない

3、モンスターなどがいる訳でもないため、ギルドの様な所がおお

っぴらにはない

4、俺たちの世界よりは危険度がはるかに低い

(こいつはモンスターとかがないことも関係してるが・・・)

こんなところか・・・？

ちょっと待って、ギルドがないってことはかなりまずくない？

金稼いで暮らしていけないじゃんっ！！

ん？ああ、そう言うことか・・・俺の体は子供になってたんだっけ？

ああ、そのことなら大丈夫だ、そのことなら考えはある

・・・随分落ち着いてるね

だから言ったじゃねえか・・・おっぴらにはない、ってな

？どういうこと？

簡単な話だ・・・

どの世界においても「光」があれば、「闇」もまた存在するってことだよ

っ！！なるほどねえ・・・でも体は子供だよ？

必要なのは子供かどうかじゃねえよ、実力があるかどうかだ、

それにそこら辺は短時間だが、幻想魔法でも使えんだし問題ねえよ  
ぶっちゃけた話、公にできない事件を探して解決する代わりに金を  
よこせということだ  
よこさなかったらそれなりのことを起こせばいいだけ・・・

実際はそれを探すだけでもかなり難しいのだが、  
その点は俺が持っている魔法を使えばいいだけ、  
経験だって伊達に何年も旅人ガリバーをしていない訳ではないためそれなり  
にはある・・・

ということは、食いぶちに関しては問題ないんだね？

ああ、そういうことさ

まあ帰れるかどうかはどうでもいいや

軽っ！！

これでも旅人ガリバーだぜ？その位の覚悟、とっくにできてるよ、  
ただ帰れたらいいかな、って程度だ

そう言いながら空間魔法を展開して中から出したのはハーモニカだ  
った

俺は旅人だ、どこに骨を埋めようとも構わない、  
ただ死んだ親父たちに言った通り、俺は幸せだったといえる人生を

送ること、

ただそれだけだ・・・

俺は死んだ親父たちのことを思い出しながらハーモニカである曲を奏で始めた・・・

それは優しかった家族を、

幸せに暮らしていた時を過ごしたの家族を思い出させるような曲・・・

家族はいなくなつたが、自分が死んでしまった時、あの世でまた家族と再会し、

そして、俺の人生がどう楽しかったかを語り、  
また幸せな時を過ごせることを願って作った曲・・・

その奏でている曲はとても穏やかな曲だった・・・

ハーモニカを吹き終わると・・・

ふう・・・やっぱりこいつを吹くと気分が落ち着くなあ

うん、ゼオの曲は私も好きだよ、

でもね、もう少し回りを確認して吹いた方がいいよ・・・

？なんでだ？

後ろ見てみな・・・

そう言われて疑問に思いながら振り返ると・・・

「・・・」ポロポロポロ・・・ 泣いてるツインテールの女の子

・・・あれ？

あんたの曲はぐつ、と来る曲だからねえ・・・

たとえば心に何か抱えてる子が聞いちまうとすぐに泣いちまうのさ

（ニヤアアアッ！！

ってなんだその笑いは！？

ん？どうやってその子を慰めんのかなあゝ、って思ってた

ニヤニヤ

い、いやな奴・・・

この後、泣いてる子供を泣き止ませることに苦勞する落ちこぼれた英雄でしたとさ

チャンチャンッ





第三話 目的？泣いてるやつを笑顔に変えることさ…（前書き）

笑い猫「続けてドンドン!!」

だせるところまでだすぜ~~~~~WWW」

ゼオ「駄目だこいつ、早く何とかしないと」

### 第三話 目的？泣いてるやつを笑顔に変えることさ…

・・・で

「あゝ・・・落ち着いたか？」

「グスッ・・・うん」

やれやれ、やっと泣きやんだか・・・（疲

甘いですねゝ、

私ならそのまんま放っておいてそのままとんずらするのにな

お前最低だなっ！！

ゲッヘッヘッヘッ、

泣いてる少女を泣かしたまま放っておいて逃げることなど、

欠陥精霊の名において許される行為であるっ！！（ドオオオオオ

ンッッ！！）

そんなこと許されてたまるかあああああつつっ！！！！！！！！

お前はもう黙つとれえッ！！！！！！

チエッ

舌打ちしやがったよこいつ・・・まあいい、これで黙ったし

さて・・・

「なあ、嬢ちゃん・・・辛いことでもあったか？」

「ふえっ！？ど、どうしてそう思うのっ！？」

「なんでって・・・俺のハーモニカ聞いて泣いたから？」

まあ自分で言うのもなんだがレインが言ってることは間違いではないし、

自分でもそういうもんだという風に納得しているし？

「う・・・」

「泣いた分で幾分かマシになったみたいだが・・・

お前さんまだ辛そうだぜ？何があったかわからないが・・・

話せば楽になると思うぞ、聞いてやるから話してみな、な？」

「・・・」

すると嬢ちゃんは、うつむいてポツリッ、ポツリッと話し始めた・・・

「なのはは・・・いい子でいなくちゃならないの・・・」

「・・・うん？どうしてだ？」

泣きやんでいたのだが、言葉をつづるたび、また泣きそうになりながらも語る・・・

「・・・うぐ・・・なの・・・は、いつも・・・1人ぼっち・・・なの・・・」

「・・・そうか」

「・・・うう・・・ぐすつ・・・それ・・・で、お父さん・・・事・・・故に・・・あつて・・・」

「・・・早く良くなるといいな」

「・・・ううん・・・それで、ヒック・・・お・・・とう・・・ヒック・・・さん・・・」

死んじやいそうで・・・ヒック・・・

「そうか・・・心配だな・・・」

「・・・それで・・・ヒック・・・お母さん・・・忙しそうで・・・ヒック・・・」

「ああ・・・」

「．．．．ズズ．．．お姉ちゃん．．．も・カマってくれ．．ヒ  
ック．．なくて．．．．」

「ああ．．．それで．．．」

「．．．．お兄ちゃんは．．ヒック．．なんか．．．怖いし．．．  
．．うう．．．」

「そうなんだ．．．」

「．．．．なのはもお手伝いしたい．．．ヒック．．けど．．．．」  
「けど？」

「．．．．なのはは1人でいい子に．．ヒック．．．してなさいっ  
て．．．．  
ズズ．．．．」

「そうか．．．」

「．．．．だから、1人で．．ぐすっ．．．いい子にしてるの．．．」

「えらいな．．．」

「．．．．でも1人はやなの．．．」

「．．．．保育園か幼稚園は？」

「．．．．行ってないの．．．．ヒック．．．」

「・・・近所に友達は？」

「・・・いないの・・・」

「そうか、・・・辛いな・・・」

「・・・ヒック・・・でも嫌われるのは・・・うつ・・・もっと嫌で、辛い・・・の」

「ああ・・・」

「・・・だからいい子に・・・してるの・・・ぐす・・・」

「嬢ちゃんはいいい子だよ・・・」

「・・・でもやっぱり・・・つめたくて・・・さみしくて・・・」

「冷たくて、さみしくて？」

「・・・悲しくて、泣きたくて・・・」

「悲しくて泣きたくて？」

「・・・助けてほしいの！-!」

「・・・」

「なのはを助けてほしいの！-!」

「おう・・・」

「家族を助けてほしいの!!」

「そうか・・・」

「お父さんを助けてほしいの!!」

「ああ・・・わかった・・・」

・・・なるほどそう言うことが・・・

俺は、嬢ちゃん引き寄せて優しく抱きしめてやりつつ、声をかける・

「・・・辛かったな、寂しかったんだ・・・  
そして泣きたかったのをずっとが増えてたんだ・・・」

「うう・・・」

辛かった・・・ヒック・・・の・・・寂し・・・ヒック・・・かったの・・・  
泣き・・・ヒック・・・たかった・・・の・・・ふええ・・・」

「・・・さっきは泣きやむように言ったが、  
残りの分、全部吐き出しちまった方が楽になれるさ・・・  
悲しい時は思いっきり泣いとけ・・・泣き終わるまで俺が居てやる  
よ・・・」

それは亀裂の入った・・・

「ひっく・・・うっう・・・」

ダムのように・・・

「うっ・・・ああ・・・」

決壊し、あふれ出した・・・

「うああああああああアアアアアアアアア・・・」

・・・やれやれ、たとえ違つて来たって俺がやるべきことは変わりはしねえな、

俺は英雄になりたいがために力を奮い続けた訳じゃねえ、

ただ、目の前で泣いている奴を放って置けなかった、

ただ、泣かせたくはなかった、

ただ、笑顔が欲しかったがために力を手にしたんだ・・・



そいつは今も変わってはいねえ・・・

ならやることは分かっているな？ゼオニス・ウォルエール落ちこぼれた英雄

それから後・・・

「・・・結構泣いたな」

「ぐすつ・・・うん／＼／」

かなりの時間泣いてたな・・・20分ぐらいか？おかげで服がぐつしよりだわ、  
まあいいけど・・・

「だがその代わり顔がすつきりしたような顔になってんな、気分はどうだ？」

「・・・うんっ！・・・楽になったのっ！..」

すると、笑顔を浮かべ元気良く返事をした・・・

「そうかそうか、お前さんの様な嬢ちゃんにやそのかわいらしい笑顔が似合うな」(ニカッ)

「あう・・・／＼／」

？なんで顔が赤くなってんだ？まあいいか・・・

「所でだ、嬢ちゃんのお父さんってのはどこにいて、なんて名前だ？」

「海鳴大学病院つてところに入院してるの。」

「名前は高町士郎・・・でも、どうしてそんなこと聞くの？」

「おいおい、助けを求めたのは嬢ちゃんだぜ？  
助けて欲しいんだろ？」

「助けてくれるの！？」

「ああ、その過程上めんどくさくなるがどうにかなんだろう、まかせな、明日ぐらいにすぐ連絡が来るだろうさ」

「ありがとうなのっ！」

「いってことよ、俺は奇跡を起こすのが得意なんでね、俺の目的を改めて確認さしてくれた嬢ちゃんへのささやかなる送りもんだ・・・」

「・・・？目的？」

「ああ、なんでもねえ、ほれ、もう日が傾き始めてるぜ？  
とっとと帰った方がいいぞ」

「あっ！うん！」

そう言って見送ろうとしたら、急に立ち止り・・・

「そう言えば、お名前なんて言うの？」

「ありゃ？そっぴゃあ言ってなかったけ？うゝゝゝん」

このまま名乗ってもいいけどなんか面白みが足りんなあ・・・  
そっだ・・・（ニヤリ）

「ってか人に名前を聞くときはまず自分から名乗らなきゃ、高町なのは嬢ちゃん」

「にゃ！？なんでなのは名前知ってるの？ちよつとずるいの！」

「いや、だつてずっと『なのはなのは』言ってるし、お父さんの姓、高町だろ？」

まあいいか、俺の名前は

その名も『真っ白お化け』！」（ドオオオオオン！！！）

「にやつ！？絶対嘘なのっ！しかも髪が白いだけに何のひねりにもなっていないのっ！！」

「ふははははははっ！！簡単には自分の名前を明かさないのが俺のクオリティだ！

異論は認めん！！」

「訂正するのっ！すっつごくずるいの～～～～っ！！！！！！」

「くはははははは！！まあいいではないか、次会えた時に、俺のほんとの名前を教えてやるよ」

「え？次って、えと・・・真っ白お化け君、どこか行っちゃうの？」

「ん？ああ、いろいろ知らなきゃ「嫌なの！」おう！？」

「せっかく知り合えたのに・・・」

「ああ・・・じゃあなのは嬢ちゃん、だったらこれ持ってる」

そう言っポケットの中から（実際は空間魔法を使った）出して渡したしたもの・・・

それはピンク色の、だけど炎のように揺らいで見えているガラスの結晶な物であった・・・

「にゃ・・・綺麗なの・・・」

「俺が作った特別製のもんだ、それを持ってる、それを持っていたらいつか会うことができるはずだ・・・」

「ほんとなの？」

「ああほんとだ、一生の別れじゃねえんだ、な？信用しろ」

「・・・わかったの」

「よし、いい子だ・・・またおうな、なのは嬢ちゃん」

「うん！」

そう言って元気良く駆けて行き・・・

「真っ白お化けくん！！またねー！！」

そう言ってなのはかけて言った

しかし、あとあと考えてみると、真っ白お化けはないなと思う自分居たり、いなかったりしたのは秘密である・・・



第四話 もう真っ白お化けで固定でいいや・・・（前書き）

笑い猫「にゅおおお〜」

なのはファミリーのキャラの感じだすのなんか難しいぞ・・・」

ゼオニス「ここに来る時期、間違えたんじゃないか？」

#### 第四話 もう真っ白お化けで固定でいいや・・・

「ここがそうか・・・」

日が完全に落ちた後、俺はなのは嬢ちゃんの親父さん、高町士郎さんが入院している海鳴大学病院に来ていた・・・もちろん約束していた治療が目的であるが・・・

「ぐふ、ぐふふふ・・・」

「・・・」

先ほど、周りに人がいなくなったため、空間の中から出てきたレインは・・・  
何やら気色の悪い笑みを浮かべている・・・いったいなんだってんだ？

「いい加減気色の悪い意笑みを浮かべるのはやめろ、いったいなんだってんだ？」

「いやあ～ロリコンだなあ～っと思ってさあ」

おい・・・ちょっと待て・・・



「なんで不名誉なこといわれなきゃならねんだよ!？」

「ええ、だって初対面の女の子泣かせるわ、抱きしめるわしたし、その上甘いセリフで

『泣き終わるまで俺が居てやるよ』なんて言っちゃって落としてたし?

それをロリコンと言わずになんて言つのよ?」

「ぶち殺すぞ!?! 甘くもないし落としてねえ!! ただかわいそうだなあって思ったただけだろ!!」

「いやいや、実年齢で言ったら10くらい離れてんのよ?

見た目じゃ問題ないけど中身がねえ……

安心しなさい、あんたは中身が立派なロリコンよ」(にやにや

ブチッ!……こいつだけは……

「……え? いやちよつと待て!?! D<sup>ダブル</sup>ジャガーなんか構えてどうする気っ!?!」

「あはははははは 大丈夫だよ? ちよつと風穴が開くくらいだから安心していいよ」

「全然安心できないんですけど?!? いやっ! ちよつ、いやああああああっ!?!?!?!?!」

・・・その後

「さて、アホは殺った・・・  
後は治療しに行かなきゃないな」

「・・・」 過去欠陥精霊だったモノ

そして高町士郎さんがいる病室に来たのだが・・・（侵入方法？もちろん窓からだぜ？）

おいおい、常人だったらすでに死んでいてもおかしくない傷だぜ？  
いったい何をどうしたらこんな怪我を負うんだ？

そう思いながらも俺は魔法陣を書きあげていき・・・

「さてできた、そんじゃ始めますか・・・」

『月よ、』

詠唱の詩をつづる・・・

『蒼き光を放つ月よ、』

それは歌うように・・・

『輝きは安らかに、』

願うように・・・

『癒しの風よ、癒しの光よ』

少女の涙が・・・

『彼の者に未来を歩むため力を』

笑顔に変わるように・・・

詠唱を詩をつづると、蒼く淡い光を発する球体が幾つも表れると、傷口にどんどん飛び込んでいき、治っていく・・・

「うう・・・」

「おや？目が覚めましたか、普通なら明日の朝ぐらいに起きるはず

だっただけだねえ」

「君は？それに此処はどこなんだ？」

「ここは病院ですよ、ちなみに名前は・・・もう真っ白お化けでいいや」

ズコッ！！ 誰かがこける音

それでいいんかい！！

もうそれでいいのじゃね？

「ま、まっしろ？どうしてこんなところに？」

「理由はなのは嬢ちゃんにでも聞いてください、それと体はちゃんと休めておくように、  
見回りの看護婦さんとか来そうなんで、じゃ！」

「え！？君は一体！ちよつ、待」

後は知らない、全部丸投げじゃ！！

s i e d

高町士郎

真っ白お化けと名乗る髪の白い少年は窓から飛び出して行った・・・窓から見える位置から行って此処が五階くらいだということが分かる、

理由はなのはに聞けと言っていたが、彼は一体・・・

そう疑問に思っていると、

ガシャン！！

「・・・せ・・・せ・・・先生えええ！！！！高町さんが目を覚ましました！！！！」

どうやら急に起きたことで看護婦をおどろいてかけていった・・・

看護婦が来そうだとだと言っていたが、人の気配を読むことができないことや、

五階から飛び出していくほどの身のこなし、一体彼は何者なんだ？

周りが騒がしくなりながらも、その疑問に頭を悩ませていた・・・

s i e d

なのは

真つ白お化け君と別れた後、お家に帰ってご飯を食べていました。

「なのは？どうしたの？そんなに嬉しそうにしちゃって」

「うん！明日になったらお父さんが目を覚ますの！」

「え？」

真つ白お化け君は明日お父さんが目を覚ますと言っていたの！  
早く明日にならないかなあ・・・

「なのは？それは一体どういう『プルルルルッ』あ、電話が」

ガチャッ「はい、高町です、え？はい、はい・・・ええ！？  
あの人が目を覚ました！？」

「なんだって！」

「ウソ！本当なのっ！？」

あれ？明日じゃなくて今日になったの！

s i e d

士郎

看護婦さんがいきなり叫んでいなくなったと思ったら、  
今度は医者と思しき人が入って来た。そして僕の様子を見るなり

「奇跡だ・・・信じられん」

と驚いていた・・・

奇跡か、そこまで言われるほど自分のケガは酷かったのだろうか・

・

だが、軽い痛みはあるが、ほとんど異常はないように思える  
試しに腕を動かしてみるが全く違和感はない・・・

やはりあの少年が何かしたのだろうか？

真っ白な髪を縛ったあの少年・・・

どこかおどけた様な、  
それでいて芯が通っていて、  
優しい眼をした少年・・・

物思いにふけっていると、複数の足音が聞こえてきた・・・

（また誰かやって来たのだろうか？）

・ 足音はだんだん近づいてきて、やがて自分の病室の前で止まると・

「あなた！」

「父さん！」

「「おとうさん！」」

ドアが開き、入ってきたのは愛する家族だった・・・

それからしばらく、涙を流しながら家族と抱き合い、喜びを分かち合っていた・・・

「そっいえば父さん。体の方は大丈夫なのか？」

「ああ、さっき医者に診てもらったが、ほとんど問題がないそうだ  
明日の検査しだいでは近日中に退院できるらしい」

「「「「えっ？」」」」



まあ、驚くのは無理もないな、

医者から聞いた話では死んでもおかしくなかった状態から、目を覚ましたすぐ、近日中に退院できる風になっているからな・・・

「そう言えばなのは、聞きたいことがあるのだからいいかい？」

「え？うん、いいけど？」

「おかしなことを言うかもしれないが・・・真っ白お化けって聞き覚えあったりしないか？」

「？父さん、なにいつて」「お父さん会ったの？」え？」

「そうか・・・彼は一体何者なんだ？」

「うん、えつとね・・・」

なのはからある程度話を聞いた・・・

なのはが寂しがつていたこと、

なのはを抱きしめたこと　このことに関しては少し話をしなくては・・・

なのはが助けてといったら、明日僕が目覚ますだろうといったこと、

そして、最後に、自分を真っ白お化けとごまかし、  
なのはに預けた不思議な結晶とまた会おうと行ったこと・・・

「そうだったか・・・」

「でも明日覚めるって言ってたの」

「それで明日お父さんが目を覚ますっていったのね」

「おそらく、僕の回復力が彼の予想を上待ったんだね、  
彼も明日目を覚ますはずだったと言っていたしね」

「自分で言っちゃってるの」

「とにかく次に会ったら詳しく聞きましょう、いつ会えるか分からないけど・・・  
いつかまた会って約束してるみたいだしね」

「わかったの」

「そうだね」

「賛成だ、なのはを抱きしめるとは・・・覚悟しておくがいい、真っ白お化け!!」

「お兄ちゃん？少しOHANASIしようか・・・」

「んお!?!」ぞわわっ!

「どうしたのゼオ?」

「なんかとてつもないいやの予感が・・・気のせいかな?」

「気のせいでしょう?」

気のせいだといいなあ・・・

第五話 化け物ねえ・・・そんなのどこに居んのさ？（前書き）

笑い猫「方向性がやっとなんて決まってきたにや〜  
がんばるべ〜」

ゼオ「駄文ばつかな、まあ見捨てないでやってほしい・・・」

笑い猫「ほっほう〜、そんなこというんだ〜  
女装どうしようか」（ボソッ

ゼオ「やめろ・・・」

## 第五話 化け物ねえ・・・そんなのどこに居んのさ？

あれから三年が経とうとする頃・・・

「いきなりに飛ばすなよ！」

「いったい誰に突っ込んでいるんだ、ゼオ？」

「いや別に・・・」

あの後、世界各地に飛んで回り裏社会に関わりまわっていった・・・

この世界でもかなり裏の領域って深いね、

ヤクザ関連からマフィア関連、誘拐、強盗、企業への妨害行動・・・

いやあ・・・かなり深いね・・・俺の居た世界とどこいだ・・・  
いや、・・・人体実験があつたことよりはましか・・・

しかし色々やったなあ、組織とかいくつ潰したっけ？

え？殺しはやったかって？

痛い目見てもらう位で終わらせてるよ？（幻術による悪夢・・・死ぬより辛いかも？）

ま、たまゝに殺しの依頼してくる奴もいたがそんな依頼を出してきた組織ごと潰したよ？

俺がやってるのは依頼人のボディガードや奪われたものを取り返すこととかで、

悪行は一切やってない・・・

「パスポートがないから国外不法入国、  
コンテナの中に隠れて船、飛行機のタダ乗りって悪行ならないの？」

H A H A H A 何のことやら・・・  
それはそれとしておいといて・・・  
今現在の居場所は・・・

「レイン、飯が出来たぞ」

「おゝ、今夜はなにになに？」

「熊鍋、さつきあつちの山で見つけて狩った」

過去、廃棄された工場などに拠点を置いている  
ホテルにも泊まってもよかつたんだが・・・  
幻術魔法いちいち使うのがとてもめんどかつた

「そついえば今回ので、いくら溜まつた？」

「んゝ、日本円で500万ちょいくらいかな？  
なかなか溜まらないもんだな・・・」

「仕方ないでしょ？しけた仕事しかないんだし・・・  
モンスターとかもない世界で仕事を選んでやってるわけだし？」

仕事を選んでいるというのは汚い仕事を除外しているという意味である、

そんな仕事をしてまでお金を欲しているわけではないし、  
何より自分としても腐りたくないというのが本音だ・・・

「確かにそうだが・・・」

「まあ、そんなに急ぐことでもないし？のんびりやっていきましょ」

「それもそうだな」

方針をのんびりやっていくことに結論づけ、  
さっさと寝て明日また仕事がないか探すかと思っていた時だった・・・

「っ！！ゼオ」

「・・・どうした？」

「何か・・・ここに車が数台向かってきてる・・・」

「・・・ここはもう誰も使っていない工場・・・」

倉庫だぜ？そんなとこに誰が・・・？」

「わからないわ・・・とりあえず上に隠れて様子でも見ていまいしょう」

「ああ、わかった」

俺は上にある鉄鋼の上に隠れると、  
何人かの男が縛られた女の子を抱えてやってきた・・・

s i e d          女の子

「よいしょっと、」

「きゃっ！！」

縛られた女の子はぞんざいに床に投げられると、男たちは下品な笑みを浮かべていた

「へっへっへっ、これで遊んで暮らせるぜ」

「結構、楽勝でしたね！」

男たちは誘拐できたことを喜んでいた・・・



女の子を攫った男は全部で10人ほどいるようだ  
その内の一人が下品な笑みを浮かべながら女の子に近づいてきた

「ひっ!!」

女の子は近づいてくる男に恐怖して震えている

「リーダー、コイツの事は好きにしちゃっていいんでしょ!？」

リーダーと呼ばれた男は呆れながら

「ああ、どっちにしろ金を貰ったら殺すからな・・・」

それを聞き男はまた不気味な笑みをこぼす・・・

「じゃあ、好きにしていいますよね!」

「好きにしろ、どうせ化け物だしな」

「っ!!」

そう言って、女の子に迫ろうとする男を除く他の男たちは車のほう

に向かった・・・

先ほどの会話を聞き、女の子はさらに恐怖が増し、震えが止まらな  
い・・・

震えてる事を気にせず男は女の子に近づいていく・・・

「じゃあ、いただきますか！」

「いやっ！」

女の子は男を足で蹴飛ばして逃げようとするが、  
縄で手が縛られている為逃げる事ができない・・・

「このガキッ！」

蹴られたことに怒り、男は女の子を殴ろうとした・・・

「（誰か助けて！お姉ちゃん！）」

・ 女の子は迫りくる恐怖に目を閉じ心の中で助けがくるのを祈った・・・

その時・・・

ドゴオツツ!!

「ガアツツ!?!」バタツ・・・

「え?」

何かで殴られるような音がした後、  
目を開く、と殴ろうとしていた男は倒れていました・・・

「ホームラン、レフトスタンド総立ち、ってか?」

顔をあげてみると、  
そこには鉄パイプを持った、真っ白な髪をした男の子が立っていました・・・

「ふゝ、無事かな、嬢ちゃん?」

「えっと・・・あ、あなたは?」

「俺かい?俺はなあ・・・」

軽い調子で言うように、鉄パイプを肩に担ぎながら・・・

「真っ白おばけさ」(ニカッ

と、優しい笑みを浮かべて言いました・・・

「・・・(きれいな笑み・・・)／／／」

そしてこの瞬間、また一人女の子を落としたのであった・・・

s i e d      ゼオニス

ん？顔が赤い、ってそれもそうか、  
こんな下種に迫られたりもすれば怖がるのも無理もないな・・・

・・・またかこいつは・・・はあゝ・・・

またってなんだよ？またって？

なんでもないよ・・・はあゝ・・・

おいおい、ため息ばかりしてつと幸せが逃げるぞ？

誰のせいよ！？誰の！？

・・・なぜわかった？まあほつといてと・・・

「ま、真っ白お化けさん？」

「ああ、あまり声は出すなよ？ばれると厄介だ・・・」

そつ言いながら女の子の縄を解き・・・

「さて、とつとと逃g「逃すと思うか？小僧・・・」！？」

声がした途端、

ズドドドドドドドドドドドッ！！！！

いきなり銃を乱射してきたのだったが・・・

「いきなりぶつ放すかな？普通・・・」

「えっ・・・！？／／／」

「ちょっと捕まってなっ!!」

即座に女の子を抱えて上の鉄鋼へと跳躍、

そのまま倉庫の窓ガラスをぶち破り、外に逃げていった・・・

「チツ!逃がすなっ!追えっ!!」

「うわあ、これはしつこそうだな・・・」

だが奴らもこのまま逃がすつもりもなく、追いかけてきた・・・

「ああゝゝ!ほんととひっこい!!いい加減あきらめやがれよ!!」

「待ちやがれっ!糞ガキ!!」

「誰が待つつ、チツ!しまった!!」

逃げていた方向には崖が・・・振り返ると9人の男たちが囲んでいた・・・

「たくっ!手間かけさせやがって!!」

「さっさとその女を渡しな、そうすりゃ楽にしてやるよ・・・くっ



「ああ、お前らがな」

カッ！！

「ぐわっ！！」

「くうっ！？」

「なっ！目がつつ！！」

引き金を引こうとする男より早く、俺はあるものを手から落として爆発させた・・・

そのあるもの、それは・・・魔法で作った、閃光弾である・・・

俺の一つ目の能力、『マジック・アイテムクリエーション  
魔法物質合成創造』

魔法と何かの物質を合成させ新しいものを生み出すことのできる能力

今回は光属性の魔法とその辺にあった石ころを合成して作った、やり方によってはシールドアイテムや、

身体能力を上げるようなアイテムまで作ることができる能力である・  
・



閃光弾で男たちの視界を奪った一瞬のすきを突き、俺は空間から銃を出して構え・・・

『ダブル クワトロショット  
D・ジャガー・D・C・S』

二丁の銃を使い、9人いた男のうち8人、リーダーと呼ばれていた男以外に銃を放つ！！

ズドドドドドドドッ！！

「ガッ！！」

「ぐっ！」

「う・・・！」

「な、なにっ！？ば、ばかな！？」

撃った球は俺が特別に作った麻醉（注：幻覚症状が現れるため危険）

で撃ってるため死んではないを使っているため死にはしない

ある意味死ぬよりいやかもしれないけど・・・

・・・何か聞こえたけど気にしない・・・

「さて、どうする？後はお前一人だが？」

形勢が逆転し、男に銃を向けながら言つと、

「くっ・・・てめえ、知ってんのかその女が化け物だってことによ  
お・・・」

「はあ？何言つてんだお前？」

妙な事を言い始めた・・・同時に、震えていた女の子の顔は真つ青  
に染まっていく・・・

「わ、私は・・・」

「そいつはなあ、化け物なんだよ！人の血を吸う化け物、吸血鬼だ  
！！  
人間のふりして気持ち悪いんだよ！！そんな奴ら生きてるだけで害  
悪だ！！！」

「わ、私は・・・」

すると女の子は涙を流し始めた・・・

この野郎・・・

「ッハ！化け物なんか涙を流してんじゃn

「耳障りだもうしゃべるな」ぐはっ！？」ドカツ！！

銃を仕舞い、一気に近づき、俺は殴り飛ばす！！

「さつきから来いてりゃ、化け物化け物・・・口やかましい奴だよ  
下種野郎！！」

「な、何しやる！？

俺は吸血鬼を「黙れって言ってるのがわからねえか！！」「っ！？」

ふざけやがって・・・！！！！

「吸血鬼だ？それがなんだ！たかだかそのくらいで殺す？  
ふざけんじゃねえ！！

俺の目から見たらおまえらのほうがよっぽどの化け物だ！  
簡単にも人を攫い、そこにある命を奪うおまえらが化け物だ！！」

「くっ・・・」

「金だの何だのほざいていたお前らが、悪だの何だの語る資格すらねえっ!!」

拳を振り上げる・・・ただし、その拳は異様に光っていた・・・

それもそのはず、拳にはかなりの魔力で身体強化をした拳なのだから・・・

「な、なんだそれはっ!?!ま、待て!!」

「ブッ飛ばされて反省しやがれ糞ったれが!!」

『ケルゲレン・ジェノサイド』（弱

本気では殴らない、本気で殴ったりしたらトマトだ・・・（笑）

「ガバアアアアアッ!?!?!」ドカアアアアッ!!

俺に殴られた男は、二回、三回とバンドしながら転がりようやく止まった・・・

「たく、胸糞悪い・・・」

「あ、あの・・・!!」

「ん？」

「私は・・・その人が言ったと通り、吸血鬼です・・・  
さつきはあなたはそう言っただけど・・・」

あなたは本当に怖くないの？ 私達は血を吸って生きてる化け物な  
んだよ・・・」

消えそうな・・・泣きそうな声で・・・そう聞いてきた・・・

やれやれ・・・

「化け物ねえ・・・だったら、俺は嬢ちゃん以上の化け物だ」

「え？」

「俺はな、その気になれば数百人をいつぺんに殺すことができる力  
があるし、

町だって10分もしないうちに火の海だってできる力を持つてる・・・

」

俺のその言葉を聞き、驚いたような顔を浮かべる女の子・・・

「なあ、嬢ちゃん俺を化け物だと思うか？」

「~~~~っ」ぶんぶんっ！！

「じゃあ俺は化けもんじゃねえし、嬢ちゃんだって違う・・・  
化け物っていうのはよ、血を飲むか、飲まないかじゃねえ、  
自分の欲望や悦楽のために理性をもって誰かを蹂躪するもの、  
それが化け物、ってんだ、  
嬢ちゃんみたいなやさしそうな女の子、  
天地がひっくり返っても見えやしねえよ」

俺はその子の目をまっすぐに見つめて、そう告げる・・・

「嬢ちゃんは人を殺したいと思うか？」

「そんなことない!!」

大きな声をあげて否定する女の子・・・  
そのことに笑みを浮かべながら

「なら断言できるぞ、俺や嬢ちゃんは化け物なんかじゃない、  
人のことを思いやることができるやさしい【人間】だってな」  
（  
二カッ

・ その言葉を聞き、嬉しかったのか、女の子は泣き出してしまった・・・

この女の敵！初対面で女の子を泣かしたの二人目よ！！最低ね！

いきなり話し始めたと思ったら何言いたい放題言ってやがる！？

でも事実じゃない！女の子を泣かすことだけは一人前なんだからこの子ったら！！

お前はどこのおかんだよ！？

念話でぎゃあすか怒鳴りあいながら、さて、どう泣き止んでもらおうと

おろおろする落ちこぼれた英雄さんでしたとさ

チャンチャンッ

第六話 驚異のロケットパンチメイド（前書き）

笑い猫「今回少ないが後悔はない！」

ゼオ「ハア・・・」

笑い猫「ため息なんか吐くな！しかないだろ！？  
なんか区切りが悪くなんだよ！」

ゼオ「別にいいからとつとつと書け」

笑い猫「・・・はい」



## 第六話 驚異のロケットパンチメイド

「のぎゃああああああっ！……！」

「よくもずかお嬢様おおおおおっ！……！」

「あ、あの、ノエルさん、ま」

「一つ……一つだけでいい！！俺に問わせてくれ！！」

なぜこんな状況に！？

急に表れたと思ったら持ってたブレードで切ってかかってくるが  
避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける  
避ける！！！！！！

状況を整理すると急にメイドが飛び込んできて、戦闘になりました  
た　　って感じだね

訳わかんないんですけど！？

「お嬢様を泣かせた罪はあまりにも重い！！」

忍様に与えて貰った、私の最後にして最強の技、受けてみなさい！  
」

右手を向けて肘から火花が噴き出し、そして・・・

・・・飛んだ・・・

ロケットパンチだあああああああ！！！！！！！！  
キラキラッ  
（

喜んでる場合かあああああああああああ！！！！！！  
！

体を思いつきりのけぞらせて避ける！！  
そのままロケットパンチは近くの森に突っ込んでいき・・・

ズガアアアアアアン！！！！

・・・地面が抉れた・・・ちょっと待て・・・

「何っ！？何なんだよあの威力！？地平線まで続いてるぞ！？  
絶対あり得ないだろ！？！？」

やべえ・・・ここから海が見えてる・・・

「チツ、外したか、だが私にはもう一発「ノエルさん待って!!」  
すずかお嬢様？」

「その人は、えっと、真つ白お化けさんは私を助けてくれた人です  
!」

「もつと早い段階で言うべき、いや言ってたけど聞こえてなかった  
んかいっ!!」

「真つ白お化け?えっと、いったいどう言うことですか?」

「えっとそれは」

説明中

「も、申し訳ありませんでした・・・」

「いや、もういいよ・・・死にかけたけど・・・」

「うっ!」(グザッ!)

「えっと・・・その・・・」

やっとなめたか、このR・Pメイドめ・・・  
ロケットパンチ

いいじゃない、とってもいいじゃない！

ロケットパンチ・・・それは人類にとつての希望とも言えるよ！！

そんなの言えるか！

「ほんとに申し訳ありませんでした・・・あの、  
すずかお嬢様がご無事だったことを忍様に報告したいのですが、  
あなたもご同行願えますか？」

あゝ・・・なんか面倒な予感がするんだが・・・気のせいだよな？

気のせい気のせい 私は逆に面白そうな予感がする！！  
ついで行けど、わたしの第六巻が告げている！！

・・・お前が面白そうな予感がする、  
って言ったら必ず変なことが起きてるような気がするが・・・

まあ、とりあえずは合つくらいなら・・・偶然だが吸血鬼だつてこ  
と知っちゃたし？

「はあ、いいですよ・・・」

「ありがとうございます、では近くに車がありますので」

そう言っつてついていくと・・・

「でかつ」

豪邸・・・おいしいものがいっぱい食べれる!!

家見て食い物の発想かいつ!

熊鍋だけじゃ物足りなかったもん!

どんだけ食う気だ!? 本来精霊、  
つて言ったら食わなくても魔力だけでやっていけるはずだぞ!? お  
い!?

味を知ってしまった私を止めるすべなど・・・  
この世に存在するわけなどないじゃない!!

だめだこいつ・・・なんとかしないと・・・

「あ、あの、どうかしましたか?」

「あ、いや別に、今行くよ」

バカ  
レインと念話してたせいで表情が百面相してたことに疑問をたれたみたいだ、  
気をつけねば・・・

誰がバカだ！失礼な・・・

おめえのことだよ！お前はしばらく黙ってる！！

念話でそんなやり取りをしているうちに、客間に案内されると、

「お待たせしました、こちらがこの当主をされている忍様です」

「初めまして、私は月村家の当主で月村忍と申します、  
この度は 妹のすずかを助けてくれてどうもありがとうございます」

「申し遅れましたが、私はノエル・K・エーアリヒカイトと申します、

先程は大変申し訳ありませんでした」

そう言つて俺に頭を深々と下げるここの当主、忍さんと、  
ロケットパンチ  
R・Pメイドことノエルさん・・・

「いや、別にかまわんさ、偶然居合わせたただけだし」

「いえ、それでも助けてくれたのはあなたです、

そのことには間違いありませんので」

「そうかい、それで？聞きたいことがあるんじゃないのか？」

そう言うと、若干空気が変わった・・・

「では、単刀直入に聞くけど、貴方は一体何者？」

「うん・・・真っ白お化けってだけじゃ納得できないよな？」

「え？真っ白お化け？まさか貴方・・・『白い悪夢の訪れ』？」

「は？なんじゃそりゃ？」

「三年くらい前から世界中の様々な組織が潰されていて、潰された組織の人間は「あれは悪夢だ、白い悪夢だ」

とつぶやいていることから呼ばれ始めた名前よ、

外見は子供で、自分のことを真っ白お化けだ、

って名乗って潰していることを聞いていたから、何の冗談を、と思っただけ・・・」

そんなことになってたのかよ・・・

まあ、わからなくもないわね、外見かわいい子供なのに、一つの組織の人間百人居ようが二百人居ようが、悪行を行っている組織は例外なく潰してたからね、

相手側から見たら【悪夢】、としか言いようがないんじゃない？

む・・・確かに、って誰がかわいいだ

「あゝ・・・確かに俺だわ、そんでもっておれが何者か、だったな

俺はゼオニス・ウォルエル、『落ちこぼれの英雄』・・・

しがない『魔<sup>マギ</sup>を扱いし者』さ」



く説明く 『落ちこぼれの英雄』という二つ名（前書き）

笑い猫「ちょっとした説明だぜい」

ゼオ「今さらかよ・・・」

く説明く 『落ちこぼれの英雄』という二つ名

ゼオの二つ名は、どんなに大きな力を使うことができなくても、それは役に立たないわけではない

違う方向性による可能性を見出していないだけであり、

その方向性を探し続けることが大切であるという意味が込められている・

・

ゼオは魔法は初級魔法しか扱うことしかできないが、

『ハイエンシエント古代魔法式』を組み合わせてある

本来、俺の世界の『魔を扱いし者』マギ達は、

普通の初級魔法を複数の魔法を発現させたり、組み合わせることしない

術式系統を組み合わせることが複雑であり、  
術式を理解するにも時間がかかる上に、扱いづらいことが理由である・・・

そこで新しく作られた魔法が中級魔法や上級魔法、最上級魔法である

強力な魔法は組み合わせのむずかしさや覚える時間の長さ、

扱いずらさをなくした魔法であり、

何より一撃で強力な魔法が放てるという魅力は大きく

その魔法は多くの人に浸透していき、それが当たり前という風になった頃、

その魔法が扱えなかった俺は落ちこぼれの烙印が押されてしまった・

・

だがゼオは、そこで諦めることなく、初級魔法を最大限に応用する、  
『ハイエンシエント古代魔法式』を学ぶことにした

他の『魔を扱いし者』達は、すぐに強くなっていくな中、  
ゼオは他の奴らよりも何倍時間をかけて強くなっていた

最初は他の奴らよりも弱かったが、徐々に力をつけ、  
いくつもの問題を解決していき、世界にかかわる危機を脱した功績  
をあげた結果、

『落ちこぼれの英雄』という二つ名がついた

元から力が使うことができなくとも、  
諦めなければ誰でも強くなることができると言ったことを込められ、  
教訓の意味の二つ名であり、

決して乏しめるために付いた二つ名ではない・・・

## 第七話 協力体制と爆弾（前書き）

笑い猫「かなり短いが御勘弁・・・」

ゼオ「・・・駄目だな・・・あとは落ちるだけ」

笑い猫「（グザリ）・・・」

## 第七話 協力体制と爆弾

「『落ちこぼれの英雄』？『魔<sup>マギ</sup>を扱いし者』？」

「まず、簡単にいえば、様々な魔に関することを扱うことのできる者のことだ、

魔法、魔術、魔道といったものを扱う者、

それらをすべてひつくるめて『魔<sup>マギ</sup>を扱いし者』って言うのさ、こんな感じでな」

そう言つて俺は手を前に出し、

『灯の炎よ、この手に宿れ』

「「「！？」」」

俺は手に炎の球を発現させると、案の定驚く忍さん達、

「と、まあこんな感じの力を使うことができるってとこかな？

まああんたらみたいなのもいるんだ、魔法使いとかいたっておかし  
かないだろ？」

「！？なぜ私たちのことを？」

「妹さん・・・もうすずか嬢ちゃんでもいいか？」あ、はい／＼／

（何で赤いんだろ？）

そっか、すずか嬢ちゃんを攫ったアホが勝手にほざいてたのを聞いたから」

「そ、そう、それはそれとして『落ちこぼれの英雄』というのは何なの？」

「俺の二つ名、測定不能レベルの魔力を持つていながら、

中級魔法以上の魔法を一切使えないから、落ちこぼれの烙印を押されてんだよ、

で、英雄って言われてるのはぶっちゃけ世界を救ったことがあることから言われている」

「「「え？」「」」

ん？なんでそんなに驚いてんだ？

そりゃそうでしょ？英雄って呼ばれている傍ら、落ちこぼれって呼ばれてんのよ？

はたから聞いて称えてんのか乏しめてるのかわかったもんじゃないでしょ？

そう言われると・・・確かになあ・・・

「せ、世界を救った？」

「ああ、言い忘れていたが俺はこの世界の住人じゃないからな？  
あくまで俺の世界の話だ」

「そうなの・・・けど、その二つ名、嫌じゃないの？」

「え？いや、それは「別に乏しめる意味で言ってる二つ名じゃない  
よ」！？レイン！？」

こいつ・・・勝手に空間内から出てきやがったな・・・

「な！？何奴！？」

「え、なに！？」

「・・・かわいい／＼／」

「何奴、と聞かれたらゼオの契約精霊『アドモス』であり、  
何、と聞かれたら欠陥精霊と呼ばれている・・・  
かわいい、と言われたらその正体はこの私！！

レインだああああ！！！！」（ドオオオオオオン！！！！）

あっけに取られる忍さん達・・・

「アホ丸出しじゃねえか・・・」

「誰がアホよッ!!」

「お前しかいねえだろアホッ!!頭の悪いような自己紹介なんかしやがって!」

「むきいいいい!!鈍感女誑しのぜオが言えるようなセリフ!?この女の敵いいいい!!」

「誰が誑しだ!!俺がいつ女を口説いたよ!？」

「やっぱりまったく気が付いてないじゃない!やっぱり女の敵ね・

・年齢層問わずに幼女少女中高年さらには未亡人まで落としていることに、

まったく気づいていなかったのね!

もう一度言ってやるわ・・・女の敵いいいい!!!!」

「人聞きの悪いこと言ってるじゃねええええええ!!!!!!」

「とんでもない子ね、この子・・・」

・・・なんか面白いおもちゃを見つけたような顔をしてる人と、顔をムツ、っとさせて膨れているお嬢さんは見なかったことにしておこう・・・

それから・・・



「           じゃあ、これでいいわね？」

「おう、大丈夫だ」

あれから少し<sup>アホ</sup>レインと言い合いになった後、  
俺の二つ名やレインの説明をすると、あえなく納得してくれた

その後、俺と月村家との関係について話し合った結果、  
協力体制を引くことになった

俺からの要請として、戸籍を作ってもらうこと、  
身元引受人の戸籍を偽造することをしてもらった・・・  
（ついでにすずか嬢ちゃんを助けてくれたお礼としてかなりの金額  
の礼金をくれた）

こちらからは月村家における運気の向上、つまり霊脈の運用である  
一見、こちらからの要請は利益的に少ないように思われるが、  
俺にとってはかなりいい取引である

表世界でも言えるが、  
裏の世界においても月村家の名前は高い方であることを俺は知って  
いた

名前の高いところと協力体制と引くことによって他の組織における  
牽制にもなる上、

裏のつながり上かなり有利になるため、俺にとっては嬉しいことだらけである

つまり、協力体制を引くだけでこれほどの利が出るため、少ないことは決してない

ここまでは良かった・・・

だが、甘かった・・・

まさか俺にこんな爆弾を忍さんに落とされるなんて・・・

「ゼオニス君、あなた、すずかと同じ学校に通ってもらえないかしら？」

「え？」

続く!!

## 第八話 再開は騒動に満ちている（前書き）

笑い猫「やっとなのはと再会！物語として話が進みそうだぜ！！」

ゼオ「あちらこちらに穴だらけだな・・・沈没しないように頑張んな」

笑い猫「・・・前作と同じく女装・・・マジでどない仕様・・・」

ゼオ「やめろってば！！」

## 第八話 再開は騒動に満ちている

「・・・なんで俺がこんなことに・・・」

ぶくくっ！餌を垂らされると同時に飛びついたのが間違いね

現在、俺は聖祥大付属小学校の三年教室の前にいる・・・  
転入生として呼ばれることを待っている・・・

また小学校からやり直すことになるとは・・・フッ、  
人生とは何があるやらわからんなあ・・・（泣

く回想く

「え？」

「だからずかと同じ小学校に通ってくれないかしら？」

おい、ちょっと待て・・・間すっぱかしすぎて何が何だか・・・

「な、何故？」

「だって、学校行ってないと将来、基本的な知識を持たなくて恥か

くわよ？

それに戸籍を作る上でその年だとしても義務教育っていうのに引っこかるしね」

「うぐっ・・・」

確かに、言われてみれば確かに今の俺の肉体年齢は九歳・・・俺ぐらいの年の子供が行ってなければどう考えてもおかしいだろう、しかし・・・

精神的にきついぞ・・・

「行った方がいいんじゃない？ゼオ」

「なんでだよレイン・・・結構きついぞ・・・」

「だってさ、

どうしても私たちの世界と若干違うところがあるから知つとした方がいいと思うよ？」

「いやしかしな・・・」

「それに戸籍とか義務教育とかだけじゃないでしょ？忍さん」

「え？どういう・・・」

レインの視線をたどった先を見て俺は理解した

「・・・そういうことが、すずか嬢ちゃんの護衛依頼の意味もある  
ってことか」

「そういうこと」

今回見たく、また攫われたりする危険性を一つで減らすってことが・  
・

く回想終了く

「そういうことならと承諾して、給金までくれるからと納得したけど・・・」

まさに餌で釣られた魚状態ってわけね

くっ！・・・否定できないのがつらい・・・

「それじゃ、入って」

「あ、はい！」

ほら、お呼びだよ！過ぎたことをぐちぐち行っていないでとっと

行きなっ！！

へいへい、わかったよ・・・まあどうせなら楽しむとしようか・・・  
・ガラッ

俺は開き直りながら中に入り・・・

「ロンドンから来たゼオニス・ウォルエルだ、  
趣味はハーモニカと情報収集、特技は武術と料理を少々、  
ちなみにあだ名は『真っ白お化け』だ、よろしく頼むぜ」

こんな所だろ、戸籍に関しては適当だが、  
武術は・・・少々レベルではないがな（笑）

と、心の中で苦笑していた時、

ガタンッ！

「ん？」

「真っ白お化け（君）！！」

「「「え？」」」

見覚えのあるお嬢さんが二人・・・叫んだ後、  
同時に見合わせる二人（＋一人）のお嬢さん方・・・  
どうやら退屈はしなさそうだ・・・

s i e d

なのは

「いつてきまゝす！」

お父さんが怪我から回復して三年が経ちましたが、  
真っ白お化け君にはまだ再開できていません・・・

首には、真っ白お化け君からもらった、  
ピンク色の炎が揺らいだように見える不思議な結晶を見つめてみる・・・

見ているだけで心が安らぎ、迷った時や困った時、  
不思議とどうすればいいか教えてくれているような感覚を覚える、  
不思議な結晶・・・

見つめていると答えが浮かぶ・・・

『何時か、また会えると・・・』

「なのは」



「なのはちゃん」

結晶を見つめているうちに、バス停の近くまで来ると、私の名前を呼ぶアリサちゃんとすずかちゃんがいました

「おはよー二人とも」

「おはようなのはちゃん」

「相変わらずギリギリね」

「にゃ、にゃはは」

二人とお話していると、バスがやってきたので、私達はそれに乗り、いつもの席に座りました

「それにしてもどんな奴が来るのかしら」

「え？なにが？」

「アレよ、転校生が来るって話」

「あ、そうだ」

一昨日、突然新しくクラスに転入してくる子がいると、話があった・

・

どんな子かな？

「女の子だったら私達が最初に友達になってあげなきゃ、  
・・・男子だったら、まあ適当にね」

「あ、あはは」

「フフフッ」

「ん？すずか、あんたやけに楽しそうね、  
なにかいいことでもあったの？」

「え？な、なんでもないよ？」

「あやしいわね・・・とつと吐きなさーい！！！！」

「なのはちゃん助けてー！！！！っ！！！！」

「（合掌）」

「見捨てられたっ！？」

「ごめんすずかちゃん・・・わたしじゃアリサちゃんを止めることは  
できないよ・・・」

その後、すずかちゃんはアリサちゃん洗いざらい吐かされてしまい、

転校生と知り合いであり、少し楽しみであることであつた

アリサちゃんが「思い人なの？」と聞いたら真っ赤しつつ、否定してしていたことから態度からして丸わかりであることがわかる・・・

「（すずかちゃんが好きになつた人ってどんな人なんだろう？  
少し楽しみなのに）」

そう思いつつ学校に向かうのであつたが、  
自分も驚くのに夢にも思わなかつた・・・

しばらくして、いつも降りるバス停についたので、私達は降りて学校に向かいました  
校門を通つて自分のクラスに入ると、みんなざわざわしていました  
やっぱりみんな転校生の事が気になるようです・・・

「みんなも気になつてるみたいだね」

「全く、ヒマな連中ね」

「え、でもアリサちゃんもさつき・・・」

私がそう言つと、アリサちゃんが私のほほを引っぱりました。

「う、うるさい！ そんな事を言う口はこの口か」

「いふあい！ いふあいよアリふあふあん！！（痛い！痛いよアリサちゃん！！）」

「あ、あはは・・・」

「すずかちゃん、笑ってないで助けてほしいの」

「はい、席について」

チャイムがなってしばらくすると、

先生が入ってきて、みんなそわそわしています・・・

「みんな知ってると思いますけど、今日からこのクラスに新しいお友達ができます」

みんな、仲良くしてあげてくださいね」

「・・・はい！」「・・・」

どんな子だろう？ 私はいつの間にか緊張していました。

「それじゃ、入って」

「あ、はい！」ガラッ

「え？」

思わず私は声が出た、

なぜなら見覚えがる真っ白な髪をなびかせて入ってきた男の子は・・

「ロンドンから来たゼオニス・ウォルエルだ、

趣味はハーモニカと情報収集、特技は武術と料理を少々、  
ちなみにあだ名は

『真っ白お化け』だ、よろしく頼むぜ」

再開を待ちに待った真っ白お化け君だった・・

私は席から立ち上がり、

「ん？」

「「真っ白お化け（君）！！」」

「「「え?」」」

思わず見合わせた、なぜならアリサちゃんも彼の名前を呼んだからである・・・

s i e d

ゼオニス

「こいつは驚いたな・・・こつもお嬢ちゃん方と再会できるとはな・・・」

・・・再開フラグですか?どこのヌルいエロゲーですか?  
その後食べるイベントでも作る気でもあんのゼオ?  
やるのは大人になってからじゃないと犯罪よ?

お前は何の話をしてやがる・・・つか勝手に食べるって何っ!?

「え?ええ!?

なんでゼオ君のことをアリサちゃんやなのはちゃんが知ってるの!?

「それはこつちのセリフよ!一年くらい前にポツと助けて即座に警察面倒だからサラダバー!!」って、  
消えたこいつのことを何で知ってんのよ!?

「私もなの!」真っ白お化けだ!!」ってだけしか教えてもらって

ないのに、  
ってアリサちゃんやすずかちゃんも真っ白お化け君のこと知ってたの！？」

・・・なんで他のクラスメイトとか先生とかそっちのけで騒いでらっしゃるのせうか？

このお嬢さん方は・・・

全部あんたが元凶だろうが！この諸悪の根源が！！

ええ！？俺のせいなの！？俺助けただけじゃん！悪いこと何もしてないよ！？

それに原因がなくとも態度やそぶりの問題あるんじゃないやあボケエエエエツツ！！

その考えなしにフラグ乱立させてることに気付きなさいよ！

この鈍感男つ！！！！

鈍感？むしろ俺は敏感な方だぞ？殺気とか気配とかには・・・

・・・あんたみたいな男はつくづく居てはだめな存在だと思うわ・

まあ、この際なんでもいいわ、とりあえず自分の目の前に迫っている御三方、

何とかするのを頑張りなさいよ

え？

「「「真っ白お化け（ゼオ）（君）！！！」」

「うおっ！？」

いつの間にか目の前まで迫っていたお嬢さん方約三名・・・

「「「きっちり説明しなさい（して）（なの）！！！！！！！」」

「・・・い、いえっさー・・・」

さてはどうなるやら・・・

そんなもん知るか！！！！

っと心の中での呟きはむなしく空を切るのであった・・・





## 第九話 騒動の後の出会い（前書き）

笑い猫「今回はフェイトがでてきます」

ゼオ「早っ!？」

笑い猫「これからどうなるやら」 適当だ!」

ゼオ「自分で言っというてかよ!？」

## 第九話 騒動の後の出会い

s i e d                      アリサ

〈回想〉

それは、1年前・・・

「いやっ！放してっ！放しなさいよっ！！」

「さっさと乗れっ！！」

「放してったらっ！！」

ロンドンで父の主催するパーティーに参加した次の日、パーティーの疲れをごまかすために近くを散歩していた時、突然車が突っ込み、中から出てきた男達につかみ掛かられ、車に押し込もうとしてきた・・・

誘拐である・・・

「さっさと乗りやがれてんだっ！乗らねえとその歯全部へし折るぞっ！！」

「（誰か助けてっ！！）」

そう思った時である、

「ハバーナイスデー・・・」

「は？（ズブリッ）あんぎゃあああああああああああ  
ああっつつっ！！！」

「え？」

急に大声をあげて私を抑えていた男は倒れた、  
見ると男のある部分にはビリヤードで使うキューが刺さっていた・  
・

「ここで一句、『誘拐犯、尻<sup>ケツ</sup>からキュー刺さって、ここに眠る！  
！！！』」

「全然五、七、五になってないじゃない！って・・・あんた誰？」

見ると、真っ白な髪をした、どことなく飄々としているような、やさしい目をした男だった・・・

「俺かい？俺は「てめえッ！この糞ガキッ！！」（ブオンッ！！）おっとッ！！」

言おうとした時、私を攫おうとしていた男の仲間が近くにあった鉄パイプで殴りかかっていったが、

「フッ！！」「ドゴオッ！！」

「おごおっ！！」

軽く避け、懷に飛び込むと同時に溝に思いっきり殴り上げる！！

「て、てめえ・・・いった・・・い・・・な・・・に・・・者・・・」

「ただの真っ白お化けだよ」

それを聞くと、男はあえなく気絶してしまった・・・

「どうやらお仲間がまだくるみてえだな、たくつ、自己紹介の暇もねえってか？」

「え？」

私を助けた彼の視線の先を見ると、新たに何台かの車が・・・

「ちよつち失礼お嬢さん」（ヒョイツ）

「へ？な、なにすんのよ！？／＼／＼」

いつの間にか私を抱えあげ（お姫様だっこ）、そのまま脇道に走りだした！！

「ん？愛の逃避行」（ニッ

「なあっ！？／＼／＼」

「冗談だ、あのままあそこにいたんじゃ捕まっちゃうし？

かと言つてこのまま尻尾巻いて逃げんのも癪だろ？

あいつらを潰すための考えがあんのさ、

まあ少しデートに付き合つて欲しいってわけよ、お嬢さん？」

「なっ！？／＼／＼ぐっ・・・ゴホンッ、

確かにね・・・このままやらればなしつて言うのも癪だし・・・  
ちゃんとエスコートしてよね！／＼／＼」

「任せてもらおうか、お嬢さん、いや、レディ？」（ニカッ

「っ／＼／」

そういつて、ロンドンの街を駆けていくのであった・・・

～回想終了～

s i e d

ゼオニス

「・・・その後、そのまま私を抱えたまま逃げてたら、急になんかばら撒いたのよ、そしたら車が横転しちゃって・・・」

「うむ！ちよつとした特殊な油だ、曲がりカーブでちょうどよかったからな・・・  
でそれで一網打尽にしたら警察が来ちゃってな？」

「で、「警察面倒だからサラダバー！！」

って言うって私を警察に預けて消えたのよこいつ・・・」（ギロツ）

「うつ！わ、悪かったよ・・・」

「はあ、まあ私はこんな感じね」

「ふえゝ、そんな出会いだったんだ」

教室での騒動の後、真っ白お化け改めゼオと呼ばれるようになったり、

・ 昼食の時に話すことを約束し、全員の話が終わったところである・

「助けてくれたけど、とんでもないやつね・・・

初対面で抱きしめたり泣かせたりお姫様だっこしたりデート誘ったり・・・

やるのがかなり大胆・・・」

「ん？そうか？そこまでじゃないと思うが？」

「「天然・・・」」

「・・・なんでやねん」

失礼な・・・これでも周りのことに関しては敏感だと自負しているぞ？

「「それ自分のこと以外でしょ（なの）（です）」」

「なぜわかったお嬢さん方・・・」

「顔に出てたわよ、っていい加減お嬢さんって呼ぶのやめなさいよっ！／／／」



「／／／」

「にやははっ、確かに照れるの／／／」

「断るっ！」

かわいらしいお嬢さん方がいてこれをお嬢さんと呼ばずしていられるかっ！！」

「「「なっ（えっ）（にゃっ）！！！！／／／」」」

「ん？どうした？顔が赤いぞ？」

「「「あんた（ゼオ君）のせいよ（です）（なの）！！！！／／／」」」

「おおっ！？」

怒られた・・・

当たり前でしょ・・・

普通にかわいいと言ったらすすがに照れてもおかしくわないわよ・・・

そうなのか？だが事実なのだから俺は正直に答えるぞ！！

なぜならそれが俺のクオリティーだからさ（キラ　ン　）

・・・誰かこの馬鹿を殺害してくれ・・・その方がこの世の女達

のためだ・・・

なぜにつ！？

この後、昼食を食べ終わり、教室に戻ったらなぜか男どもににらまれる事態に・・・

なーぜー・・・

そんなことを疑問に思いながらも授業は滞りなく進みようやく下校時間になり、

とつとと帰ることにした・・・

「（さつさと帰るか、荷物の整理もまだ終わってないし・・・）」

俺は月村家の礼金や給料、

今まで稼いだ金でようやくまともなマンションで生活することになってた・・・

旅の際、私物は常に空間魔法内に入れておけば便利なのだったが、出す時に、上から物を落とすような形になってしまったため、機械や壊れやすい物の類はすぐ出す際にはまずアウト

さらにいくらでも物を入れることはできるのだが、入れすぎて何が入っているのかもわからなくなってしまうことだっ

てある

そのため、入れすぎた際、空間魔法内に入って整理してみた時、いろんなものが浮かんでいる状態になってしまっていることだってある……

食材を入れている時など、時間の概念と切り離されたような空間であるため、

腐らないからと言って、

いろんな物入れすぎてしまった時、えらい目にあったこともいい経験である……

どこがいい経験よっ！

魔物の生肉を血抜きもせずに入れてたせいでどえらいことになってたじゃないのっ！！

いや、駆け出しの時に聞かされていたけどあんなことになるなんて……

失敗失敗（テヘツ

……次同じ事態になっているようなことあれば……そうだねえ、

ばらばらに解体してこの世から抹消

絶対同じことは繰り返さないことをここに誓おうっ！！

……そうしなさい、さもないと現実に実行してやるわ……

マジで気をつけよう……俺の身の安全のために……っ！！



そう相槌をして空間内に石を放り込み、岐路についた・・・  
マンション付く頃には9：00を回ってしまっていた・・・  
買い物にかなり迷ってしまった結果である

「だー・・・疲れた・・・」

なんでもいいからさっさと作りなさいよ！！おいしいものが食べたいッ！！

「へーへーだったら今夜は刺身にしてやるよ」

おー、豪勢だなっ！！

「新しいところでの初っ端だしな」

そう軽口を言いながらマンションの扉を開けようとする・・・

「ッ！！」

中に誰かいる気配を感じた・・・

・・・ゼオ

ああ、誰がいる・・・コソ泥か？

気配を消し、ゆっくりなかに入ると部屋には・・・

「はあ？」

金髪の少女と大型の犬？が寝ていたが眠っていた・・・

「・・・んう・・・なに？・・・」

呆気にとられてばかりんつとしていると金髪の少女は目をこすりつつ目を覚まし、

目が合って、お嬢さんは首をかしげた・・・

「・・・えーっと・・・おはよう、かな？お嬢さん」

とりあえず声をかけてみることにした・・・

s i e d

???

母さんに頼まれた仕事

・・・ジュエルシード探し

それを行うための住居を拠点に動くことにした・・・  
さっそく1つ手に入れることができ、先はまだまだ先が長い・・・

明日に備え、早めにアルフと共に眠ることに・・・

だけど・・・

「・・・んう・・・なに?・・・」

物音がして目を覚ますと・・・

「・・・えーつと・・・おはよう、かな?お嬢さん」

髪の真っ白な、どこか飄々としていて、  
どこかやさしい目をした男の子が立っていました・・・





第十話 流れからして居候？（前書き）

笑い猫「やっぱり原作見てないときつい・・・」

ゼオ「ちゃんと見てからやった方がよかったんじゃないの？」

笑い猫「止められなかったんだ！！書きたい衝動が先に来ちゃってな（てへっ）」

ゼオ「馬鹿めが・・・」

## 第十話 流れからして居候？

「(ぼ~~~~~)」

「あれ？まだ寝てんのか？おい」

寝起きが弱いのか？それともこの子なんか天然でも入ってんのかな？

あんたが言えるようなセリフじゃないね

なーぜー・・・

「・・・(はっ！)あなたは誰ですかっ！？」

「ここの部屋を買った者だよ、お嬢さんこそ誰だい？」

「え？わたしは(ぐ~~~~~っ・・・)」

お嬢さんのおなかから大きな音が、腹の音が聞こえた・・・

「・・・」

「・・・／／／」

「・・・俺たちも晩飯にするけど・・・一緒に食べるか？」

「・・・え？・・・（コクリ）／／／」

「そっか、ちよつと待ってな」（ニツ

「ツ／／／」

「（ん？さらに赤みが増したような？気のせいか・・・）」

じゃあさっそく飯でもと来るか・・・

・・・いいのゼオ？あの子から何か魔力を感じるよ？

んゝ、大丈夫だろ？なかなかの力をもってそうだけど・・・  
悪用できるような眼はしてないし？

まあどうでもいいや・・・人数が三人・・・いや四人か？  
たぶんあのでかい犬？も食べるだろうし・・・

刺身じゃ足りねえな、

変更して魚と野菜を軽く煮込んだ鍋と炊き込みご飯にでもするか・・・

えゝゝっ！！急に変更すんの反対！！刺身！！断固刺身がいい！

！  
文句ガタガタ抜かすな、急に増えたんだし仕方がないだろ？

でも~~~~~

・・・後でプリンも付けてや」さぁッさつさと作れ!!  
さつさと食ってプリンを我に!! ・・・口調が崩れてんぞ?

フツ、チヨロイな・・・

「・・・んう~~~~? いい匂い? フェイト~~~~?」

用意し始め、いい匂いが漂ってくると犬? が起きた、  
しゃべるってことは使い魔か・・・

「あつ、アルフ、起きた?」

「やっと起きたのかよそいつ・・・」

「ッ!! あ、あんた誰だいッ! ?」

「「この部屋を正式的に買ったもんだよ、それより飯ができたから  
食うぞ、ほれ」

「あ、ありがとう／＼／」

「どういたしまして、レインもとつと出て来い、さつさとしないとプリンもなしだ」

「わっくっ！！食べる食べる！！」

「わっ！？なんだい！？どこから出てきたんだ！？！？」

「後で説明すつからまず食べ、お前はどうすんだ？」

「あ、あたしは、「ちなみに食うことを拒否した場合、罰として縛りあげた後につるしあげて犬鍋の材料に・・・」

怖いこと言っんじゃないよっ！？？てあたしは狼だっ！！」「そうか、ならば狼の干し肉に・・・」「どちらにしても食用にされるっ！？？  
フェイトツ！！このままじゃあたしは食われちまうよ！？？」

「え、えつと・・・」

「だから黙って俺が作った飯を食えばいい話だ、どうする？」

「うっ、わ、わかったよ」

「チエツ、今後のおかずが減っちゃったな・・・」

「やっぱりあたしを食べる気だったのかい！？」

「まあまあ、もちつけ、とりあえず席に着きな」

「誰のせいであわてたと思っでんだい・・・」

と、なんだかんだ言いつつ席に着く狼・・・  
ま、どうでもいいが、飯だ・・・

「よろしい、では、手を合わせろ」

おどおどしつつも手を合わせる・・・

「いただきます」

「「「いただきます」」」

恐る恐るといった感じで炊き込みご飯を口に運ぶ・・・

「おいしいっ！」

フツ、当然だ、俺の世界にも同じような食材もあったし、

伊達に何年も旅はしてないさ・・・

一口食べると二人は待ちきれないといわんばかりに食べ始めた・・・  
俺もそれを見て食べ始める・・・

うん、うまし・・・

・・・で

「さて、腹も膨れたことだし、そろそろここにいる理由とか話してもらおうか」

そう言っていると、若干空気が重くなり、目の前の二人は顔を引き締めるが、

「あゝ？、プリンおいし〜〜？」

「・・・<sup>アホ</sup>レインはこれ際ほっといいていいぞ・・・」

「え・・・つと・・・はい・・・」

何とも微妙な空気になってしまったが、それでも話は進んで言った・  
・

話の結果、わかったことは

- 1、名前はフェイト・テストロッサと使い魔のアルフという名前
- 2、目的はジェルシードという一つ一つが強大な「魔力」の結晶体を探していること
- 3、理由は話せないらしい（おそらく大切な存在、年から考えて親に口止めされているってところか）

4、ジェルシードをそのまま放置しておく  
周囲の生物が抱いた願望（自覚の有る無しにかかわらず）を叶える  
特性を持つているため、  
暴走を引き起こしてこと

5、探すにも拠点が必要だったため、  
ここが都合がよかったから勝手に使っていたらしい・・・

「ふん、ジェルシードってこれのことかい？」

俺は空間内から帰りに拾った緑色の石を取り出す

「っ！！それです！それを渡してください！！」

「渡さないとガブツといくよ！！」

急に戦闘態勢をとる二人、なるほどね・・・

「ほれ・・・」ポイ

「えっ！？えつと・・・いいの？」

「俺が持つてても仕方がないし？  
それにそのまんまだと暴走しちまうんだろ？」



だったら封印してくれた方がいいだろう、

それに魔力の結晶体だが、それを悪用するつもりはないんだろ？  
だったら渡しても問題はないさ」

「え、えつと、うん

ありがとう」

それよりもだ・・・

「それより、お嬢さんに今からすることがある」

「え？」

「何するつもりだい、アンタ？」

俺はおもむろに立ち上がりつつ、先ほどから見えているところを指摘する、

「なに、お嬢さんの治療だよ、背中にかすかに血が滲んでるぞ？」

「「っ！！」」

驚きかたまる二人を横目に軽い調子で話を進めていく

「レイン、治療を頼めるか？」

「ふふ〜ん、お優しいこって・・・いいよ」

「うんじゃ、『契約執行・癒しの雫よ、彼の者に傷を癒し続ける』」

「『契約の確認・始まりの雫よ、やさしく吹き続ける風よ、彼の者中に宿れ』」

俺はレインと契約魔法を執行、フェイトお嬢さんの周りに透明の、まるで生きているように渦を取り巻く水が出現した

「え！？きゃっ！？」

「フェイトっ！？」

驚くフェイトお嬢さんの無視し、その水はフェイトお嬢さんの足もとに落ちると、

魔法陣の形に書きあげられ、淡い幾つもの光が出現、出現した光は溶け込むように、

フェイトお嬢さんの体に吸い込まれて行った・・・

「これで終わり、傷も治ったはずだ」

「え！？あ、ほんとだー！！」

「アンタ、もう少し説明してくれてもよかったんじゃないか？」

「ぶっちゃけめんどい、そしてもう眠いから寝たいし？」

明日にでも話してやる・・・フアァーア・・・」

あくびをしつつ隣のソファーに寝っ転がり、

「・・・ここで居座る許可もやるよ・・・明日も飯作ってやる、今日のところはさっさと寝な」

「え、えーっと・・・はい」

さあもう寝よ寝よ・・・もう限界だしな・・・

s i e d          フェイト

「もう寝たみたいだよあいつ・・・でも何者なんだろうね」

「う、うん」

結局、自分の話をただけでゼオが何者なのか一切聞くことができなかった

魔道にしては全く分からない魔法、それも私の傷を治すほどの強力な魔法・・・

おそらく私よりも数段強いだろう、でもそれでいて飄々として、  
適当な風にしているやさしい・・・

「ゼオはきっと敵じゃないと思う・・・だから大丈夫だと思うよ」

「うん・・・フェイトの傷を治してくれたしねえ・・・」

ゼオは何者なのか一切わからない、  
けど私たちに敵対するつもりはないことはわかる・・・

疑問はあるがなぜかそう感じながらもソファで眠るゼオを見つめ  
た・・・

「まあ、明日話すと言っていたしフェイトももう寝よ？」

「うん、お休みアルフ」

お休み・・・と言葉が返ってきたお後、私も眠りに着くのだった・・・



第十話 流れからして居候？（後書き）

笑い猫「これから実習があるため1カ月ほど空きます・・・中途半端だが御勘弁を・・・」

$$\dots \wedge \pi^{\circ} \wedge \pi^{\circ} (\cdot) m - ) m$$

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5214v/>

---

リリカルなのは～落ちこぼれと言われた英雄～

2011年8月27日11時15分発行